

第 172 回 (同年 5 月 12 日) のプロトコル

哲学的問い (From Araki): 「対象界と内面的時の接続点、結合点に居る自己は、外面的方向に向かうばかりで、内面的時に向かう感覚の喪失ということも起こりうるのではないだろうか」。

ようするに、普段に物理的時間に追われる我々は、我らの根源であり、エネルギーである具体的経験、内面的時 (下) に気づかないまま生きています。それで、「具体的経験、内面的時 (下) を気づかないならば、具体的経験 (下) があるといつていいのか」。

その問いをめぐって、議論はあった。ある方は内、外を分けて内に気づくことができるかどうかを考えることはすでに分別であると主張した。発問者は気づくにはある人ができる、ある人ができないというようなレベルの差があるのかを聞いた。佐野先生は『善の研究』「第一篇知的直観」を読んで、知的直観に理想的要素があり、それが経験の進むに従ってどこまでも豊富深遠となることができる、ゆえに知的直観には深淺の差があると確認された。西田は二つの問題—①具体的経験 (下) を見たと言っていいのか、②昨日の意識と今日の意識が一つであるのか—を長い間に念頭に置いていた。発問者は昨日の意識と今日の意識は一であってほしいと言ったが、ある方は一つであってほしい時あり、一つであってほしくない時もあると言った。佐野先生は (下) への確認ができないなら、自己のアイデンティティが崩壊するので、人間はいつも自己存在への不安を抱えて生きていとされた。

そして、内面的時があるかどうかをめぐって、各々が意見を述べた。発問者は何かに集中する時、時の流れを感じないので、各々が内面的時を持っていると主張し、内面的時 (下) は潜在的にあるけれども、我々は常に気づかないと言った。ある方は、それに賛成し、「内面的時の伸び縮み」に言及した。だが、ある方は絶対的時間 (所謂 24 時間) があると反対した。佐野先生は人間の矛盾の性質—真実 (下) があるからこそ不安に陥るといふ面がある同時に真実がないからこそあると思いたいという面もある—と主張し、自己が内面的時に向かう感覚の喪失の問題は実は不安の問題であるとされた。自然 (じねん) —不安が自然に起こることを納得できれば、不安がなくなる—という考え方もあった。ここで、議論はひとまず終わった。

本文要約

『直接与えられるもの』p33「この如き主観は」より p36「含まれたものが発展することである」まで読了。

1. 「意志主観は仮定にすぎない」に対する反論

真理を考える (上) 時、真理への意志 (下) の上に立って考えると同様に、意志主観は仮定にすぎないと考える時、既に意志主観 (下) の立場に立って考えているのである。

2. 「感覚を離れて意識現象はない」というのは

具体的意識においては、感覚の底に無限なるものがある、感覚はその無限なるものの自己限定の過程である、どこまでも限定せられて行くべきものである。

3. 感覚 (意識) の根柢には無限なるものが働きつつある

無限なるもの即ち永遠の過去から永遠の未来に互って働きつつあるもの (所謂「時」を超越する意志) である。

ゆえに、昨日の知覚、思惟は直ちに今日の知覚、思惟に繋がるのである、心理学者が考えた意識の範囲というのは反省し得る範囲にすぎない、また反省しえないとしても意識があったと推論し得る範囲である。

4. 反省によって知的対象界に持ち来し得るもの (意識の範囲、本能、物力) と意識の根柢における無限なるものとの區別

前者は既に対象化されたものに対して、後者はその背後に永遠に働きつつあるもの、永遠の現在、反省 (知識の立場) によって達することができない深き奥底である。ゆえに、我々は後者の立場 (超越的意志の立場) に到達した時、自己の意識に対して見た本能、物力、「時」は消え失せて、主客合一の一直観となるのである。

5. 直観の内容として現れるものとは

具体的経験の内容であり、すべての立場を含んだ全我の意識内容である。後に想起し、思惟するものはこの立場 (直観の立場) より発展してくるのである。

6. 直観の立場

アウグスティヌス: 神創造以前に「時」はない、「時」も神の創造したもの プラトン: (知識) すべてがアイデアの世界の想起
我々はこの立場において、自己の人格的歴史を構成し、さらに進んで客観的歴史をも構成する。

ゆえに、この立場 (時がない立場) において、我々が過去を想起するというは過去を直観するのである。

7. 過去を直観すること

思惟においては我々は永遠の真理を直観することができる。この場合、真理は当為の世界 (理想の世界) においてある。過去の事実も真理としてこの世界に保たれるのである、ゆえに我々は過去の事実を幾度想起することができるのである。記憶において繰り返されるものは、感覚の背後に含まれていたものである。後にこれを想起することは超感覚的立場において含まれたものが発展することである。

哲学的問い: 『直接与えられるもの』における無限に働きつつあるもの自己発展と『善の研究』における一実在の分化発展とはだいたい同じであるのか、そうではないなら、両者はどんな関係にあるのか。